

氏 名 宇佐美 智之

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2022 号

学位授与の日付 平成 30 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 集落動態にみる北部九州弥生社会の生成と展開

論文審査委員 主 査 教授 倉本 一宏
教授 井上 章一
准教授 磯田 道史
教授 藤尾 慎一郎 日本歴史研究専攻
教授 宇野 隆夫 帝塚山大学 文学部
教授 天理大学 桑原 久男 文学部

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

日本列島における諸文化・社会の多くは東アジア諸地域との関わりをもって生成・展開してきた。その歴史の中でも、水稻農耕、青銅、鉄をはじめ、さまざまな文物を取り入れ、それらを複雑に組みあわせて営みをおこなっていった弥生時代の社会のあり方は、特に注目できるものである。

本論文はこのような観点から、中国・朝鮮半島などに関わりをもちつつ弥生社会がどのような変容過程をたどったかを考察するものである。主な対象地域として北部九州を取りあげ、集落動態の分析をつうじてこの課題に取り組んだ。

序章では研究史を整理し、集落構造の研究と地域的動態の研究という大きく 2 つの方向性のもと弥生集落研究が発展してきたことを確認した。このうえで特に後者に着目しつつ、集落の立地・分布パターンを捉える視点（空間分析）が不足していることを指摘し、これを補うことで集落研究をより発展させようと考えた。また、北部九州の諸地域相互の比較が十分になされていないことを指摘し、その検討を充実させる必要があると考えた。これらをふまえ、北部九州を 4 つの地域（博多湾沿岸周辺域、佐賀平野、筑後平野北部、筑後平野南部）に区分し、弥生時代早期から終末期にいたる地域的動態を個別に整理して、総合的考察をおこなうこととした。これとあわせて、西日本や朝鮮半島諸地域、また、中国における集落・都城の様相を概観し、より広い視点から北部九州の変遷過程の特徴を捉えることを課題とした。なお、ここで示す弥生早期～終末期という時期区分と土器編年および暦年代との対応については論文中で説明を加える。

第 I 章では、以上の方針にもとづき具体的分析作業を進めていくうえでの基本事項を整理した。また、分析方法の概略を記述した。

第 II 章では博多湾沿岸周辺域における集落動態の検討をおこなった。福岡平野、早良平野、糸島平野に焦点をあて、個別集落資料の整理と立地・分布分析をつうじて、I. 早期～前期前半、II. 前期後半～中期初頭（前半）、III. 中期前半（新相）～中期後半、IV. 後期前半、V. 後期後半～終末期、という 5 つの段階にわけて、その展開過程を理解した。この結果、II 期および III・IV 期に重要な変化が見出された。特に後者の段階の福岡、糸島平野にみる動きは際立ったものであり、中心地が確立していく過程として評価された。一方で、I・II 期からの変化が著しいことをふまえ、朝鮮半島や中国（前漢王朝）との接触が重要な意義をもったことが推察された。

第 III 章では、同様の手法を用いて佐賀平野の集落の動向を検討し、I. 早期～前期前半、II. 前期後半～中期初頭、III. 中期前半～中期後半、IV. 後期前半、V. 後期後半～終末期、という 5 段階にわけて理解した。ここでは分布・立地の様相とともに、吉野ヶ里遺跡群、惣座遺跡のように、内郭―外郭構造や方格指向の環濠（溝）が新たに現れてくる III 期から IV・V 期への流れに特に重要な変化があることなどを指摘した。

第 IV 章では筑後平野北部に着目し、I. 早期～前期前半、II. 前期後半～中期初頭、III. 中期前半～中期後半、IV. 後期前半、V. 後期後半～終末期、という 5 つの段階にわけて当該地域の集落の動向を整理した。I・II 期に形成された 8～10 個前後の分布のまとまり（高密度地点）が、III 期の中で減少傾向となり、IV・V 期には 4～5 個前後になっていくとい

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

う流れが明確化した。また、Ⅲ期をつうじて東小田峯遺跡のような大型集落が展開するが、Ⅳ期には平塚川添遺跡、平塚山ノ上遺跡などの大型環濠集落の発達もあることから、集落構造においてもⅢ期からⅣ・Ⅴ期への流れに重要な変化があることを指摘した。

第Ⅴ章では、筑後平野南部の動向を検討し、Ⅰ．早期～前期前半、Ⅱ．前期後半～中期初頭、Ⅲ．中期前半～中期後半、Ⅳ．後期および終末期という大きく 4 段階にわけてその流れを整理した。ここでもⅢ・Ⅳ期において特に重要な変化があり、Ⅱ期以来の分布のまとまりの中に環濠や直線区画施設などをともなった大型集落が出てくる例があることが理解された。

以上の検討をふまえ、第Ⅵ章では、① 西日本の諸地域（北部九州隣接諸地域、九州以東諸地域）における弥生集落の動向、② 朝鮮半島の主に無文土器時代から原三国時代（楽浪郡期）にみる集落および都城の様相、③ 中国の新石器時代以降における環濠集落および都城（城郭都市）の出現・展開の流れを概観した。

上記① の作業では最初に北部九州隣接諸地域として 7 地域を取りあげた。特に中期から後期にかけて重要な変化があることが確認されるとともに、それらと対比させた場合に、福岡、糸島平野の動きが特異であることが示唆された。また、西日本の 4 地域を取りあげ検討を加えたところ、奈良盆地にみる集落の展開様相が特徴的であると評価でき、さらに福岡、糸島平野にみる動きと対応的な面があることを把握した。このことをより深く考えるため、次に朝鮮半島および中国の集落・都城の形成過程を整理することとした。

上記② の作業として、朝鮮半島を南部・北部に区分し、前者については無文土器時代から原三国時代を中心とする集落の展開を、後者については楽浪郡の存続期に属すると推定される 6 つの都城（土城）の様相を概観した。朝鮮半島南部では、無文土器時代の環濠の規模や形態において北部九州や奈良盆地などにみる環濠集落一般と類似性が高いことが把握された。中でも慶尚道検丹里遺跡にみる無文土器時代中期の環濠集落のあり方が佐賀平野の前期環濠集落と対応的であり、規模や形態にとどまらず、地域社会の中で占めるその位置が相互に関連することが推測された。

上記③ の作業として、新石器時代から漢代頃における環濠集落・都城を概観し、1) 新石器時代前・中期、2) 新石器時代後期、3) 新石器時代末期～春秋時代、4) 戦国時代以降という 4 つの段階を設定してその変遷過程を整理した。この結果、弥生時代の環濠集落一般のあり方は、1) とよく対応するものと考えられ、また、佐賀平野の吉野ヶ里遺跡群、奈良盆地の唐古・鍵遺跡などは 1)、2) の中間的な位相を示すものであると評価した。一方、福岡平野の須玖遺跡群、比恵・那珂遺跡群、糸島平野の三雲・井原遺跡群などは、中期後半の段階で、3) 以降に必須の構成要素として出てくる方形・直線区画を部分的に取り入れていることなどから、弥生集落一般とは異質なあり方であることが理解された。

終章では以上の検討結果を整理し、主に次の諸点を指摘した。(1) 北部九州の弥生集落の展開にはその最初期から地域差があり、A) 博多湾沿岸周辺域（福岡、糸島平野）と、B) 佐賀平野、筑後北部・南部とに大きくわけて理解できる。そしてそのような地域差をともしつつ、いずれの地域でも(2) 前期後半～中期初頭および(3) 中期後半～後期前半の中で重要な変化が生じる。(3) に関しては、それ以前とは異質な動きが顕在化するという点で特に注目される。すなわち、福岡、糸島平野では大型集落相互が緊密な位置関係を築きつつ、卓越した規模・内容をもつ中心地的集落が確立し、B) の諸地域では分布のま

(別紙様式 2)

(Separate Form 2)

とまりが形作られつつ、その中で複雑化した構造をもつ大型（環濠）集落が発達しはじめる。この流れは西日本全体をみても独特であると評価でき、そこに中国・朝鮮半島との関わりが大きな影響をもつものであったことを推定できる。

以上の理解をふまえ、(3) に焦点をしばり、中国史書の記録や先行研究の見解を参照しつつその背景について考察を加えた。結果、前 1 世紀頃の楽浪郡を介した前漢王朝との接触を契機に、福岡平野（「奴国」）、糸島平野（「伊都国」）が主導的な役割を果たして北部九州一円を覆う社会・政治体制がすみやかに編成されたこと、そしてそのころみが弥生後期に確立したことが想定された。またそれは「倭」社会が中国を軸とする東アジアの国際情勢に主体的に身をおき、より強固な社会・政治的枠組みを構築していくうえできわめて重要な基盤となったものと推察された。